Staff Blog

園長室ブログ

ノアのバスがやってきた！

茨城県北芸術祭(KENPOKU ART 2016)が、茨城県の県北地域で始まりました。日立市もこのエリアに入っていて、25組のアーティストたちによる作品が市内に展示されています。このうち間接的に動物園も関わらせて頂いてる作品があります。それは、フィンランド出身で、ドイツを拠点に活動しているテア・マキパーさんの作品。タイトルは「ノアのバス」。

«ノアのバスあらわる»

テアさんは、以前から人間と環境をテーマに、乗用車などに植物や動物などを入れ、自然との共生を問う作品を発表してきました。今回も作品制作にあたり、ノアの方舟をイメージした空間を創りたいと関係各方面にアプローチをかけ、この作品が誕生しました。当園にも2度ほど訪れましたが、1度目は、自分でもたくさんの動物を飼ってるだけに(中でもスカンクが大のお気に入りとか)、園内を案内すると子どものように目を輝かせ、ある意味「大はしゃぎ」状態と化していました。

«作者テア・マキパーさん、抱いてるのはレースポーリッシュ»

実際の制作にあたっては、バスを借りる交通事業者やバスの中に庭園を造る造園屋さんなどの協力が不可欠で、そうした調整役は芸術祭を運営する側のキュレーターさんやアシスタント役が行ったのですが、当園に打合せに来た時も、そんな動物に対する愛着と自然との共生を表現するテアさんに、1も2もなく協力したいと伝えました。当園の協力は動物の提供・

指導と、動物の世話をする飼育者の紹介、提供動物の健康管理などで、提供動物はウサギやモルモット、レースポーリッシュ(ニワトリの品種)など5種類の小動物です。

«みんなの協力で完成。後列左から3番目テアさん»

　完成した作品は日立駅前の広場に置かれています。一見、何気なく停留所に止まっている「山行き」のバスですが、よく見ると天井やバスの周りにはたくさんの草花が。中を覗くと座席が取り払われ、土が敷かれ、たくさんの草花が咲き乱れています。そしてそこを気持ちよさそうに歩くウサギやカメ、ニワトリなどの小さな動物たち。そのままになった吊り革にはインコが止まっています。まさに人間の作った人工構造物内に異空間が出現です。動物のお世話をする飼育員さんはバスガイドという凝りよう(男性の場合は運転手)。芸術には疎い私ですが、これは素人目にもインパクトのある作品で間違いないと思います。正直、中に入った瞬間感動しました。また、場所もいいのか、多くの人が突然現れたバスに、「？？？」と足を止め、中を覗いて「！！！」となっていました。

«内部の異空間とバスガイドさん»

テアさんに感想を聞くと、バスはこれまでの中で一番大きい作品で、とても満足してると話していました。実は会期が始まる前日に日立市でレセプションがありました。芸術祭に参加する約85組のアーティストが一堂に会し、約2か月間に渡る船出をお祝いしたのですが、そのあとの交流会で当園の飼育員数名とテアさんとでお話をさせてもらいました。そこで先ほどのような感想が聞けたのですが、このほかにもオーストラリアの動物たち、とりわけカンガルーやコアラのなどのポピュラーではない動物たちが数を減らしていることにとても関心があり、心を痛めているなどと話されていました。そんな思いがこのような作品を生む契機となっていったのかもしれません。

«レセプションで一堂に会したアーティスト»　　«交流会で。テアさんと動物園職員»

私たちも動物展示を通して、野生の動物たちの現状や問題などを発信していく立場にありますが、手法は違えども同じ思いを共有することができました。そんな意味では、テアさんの作品に協力することで異文化と接する機会が与えられ、こちらとしても大いに刺激を受けたところです。声を大にして訴えること、作品を通して訴えること、動物を通して訴えること、皆一緒なのですね。ぜひ一度足を運んでみてください(観覧無料)。

※1　茨城県北芸術祭公式ホームページはこちらから。（新しいウインドウが開きます）

※2　「ノアのバス」の内部には入れません。デッキなどの観覧場所からご覧ください。

2016年9月18日

赤ちゃんカナちゃん

先々月のブログでカナヘビ飼育のことを書きました。夏の行事の「身近な生き物甲子園(8/1～9/4)」に出展するためです。期間中、採集された2頭を最後まで無事お客様に見てもらえるか、初めてのことで少し不安もありましたが、何とか2頭とも元気なまま最終日を迎えることができました。しかも、オマケ付きで！そうです。2頭のうち1頭はお腹に卵を抱えていて、そのうちの1個から赤ちゃんが誕生したのです。私も始めて見るカナヘビの赤ちゃんでした。

«産まれたよ»

卵は4つ産んだのですが、そのうちの3つはダメでした。卵を見つけたのは小さめのケースから大きめのケースに移すときでした。1頭の腹が大きかったのでもしや、という予感はありましたがまさか産んでたとは。そこで、卵だけを別なケースに移す時、無造作に移したため上下がひっくり返った恐れがあります。爬虫類の卵は、鳥と違って上下反転させるなどはもってのほかなんだそうです。それでもしばらく卵のまわりに水をやりそのまま観察していましたが1個だけは少しずつ大きくなっていくものの、ほかの3個は全く変わらず、日を追って黄色っぽくなり、そのうち周りにカビ様のものが見られたので、止む無く廃棄しました。

«4つのタマゴ»

残ったひとつだけでも何とか孵化して欲しい、と時々卵のまわりに水をやりそのまま様子を見ていました（は虫類の卵は土の中の水分をとって少しずつ大きくなるそうです）。そして、9月1日、見事孵化！といってもその時、私は夏休みを利用して東北地方の動物園や水族館を呑気に巡っていました（事前にエサなどはたっぷり与えておきました）。その旅の途中で何気なく見た当園のフェイスブックに「カナヘビに赤ちゃんが・・・」とあったのを発見し、驚いたというわけなのです。孵化期間は約40日前後。「生き物展」期間中に間に合うかどうか、と言ったところだったのですが、ぎりぎりセーフでした。

赤ちゃんは頭から尻尾の先まで約4センチメートルぐらい。卵の大きさは縦1センチメートル、横7ミリメートル程度でよくこの中に納まってたなあと驚きます。私の留守中、飼育員が産まれたての赤ちゃんにワラジムシを与えたところ、パクッと喰いついたそうです。

«サイズ感＝赤ちゃんと卵と電池»

「生き物展」では、当初私の担当する生き物はカナヘビだけだったのですが、エサとして与えていたコオロギがかなり大量に採れたので、コオロギも併せて展示しました。コロコロリーリーと鳴く虫が涼やかさを誘い、また残り3日では赤ちゃんも展示に加わり、最後は賑やかなカナヘビコーナーとなりました。

さあ、問題はこの後。当然、採集したカナヘビちゃんたちには元の採集地に戻ってもらうのですが、ここまで世話してると別れがつらい。そして「赤ちゃんひとりでエサ探せるかなあ」とか、「ほかの肉食昆虫や鳥たちに食べられちゃわないかなあ」と悶々としてるのです。

«さよならカナちゃん・コロちゃん»

2016年9月5日

過去の一覧

令和6年